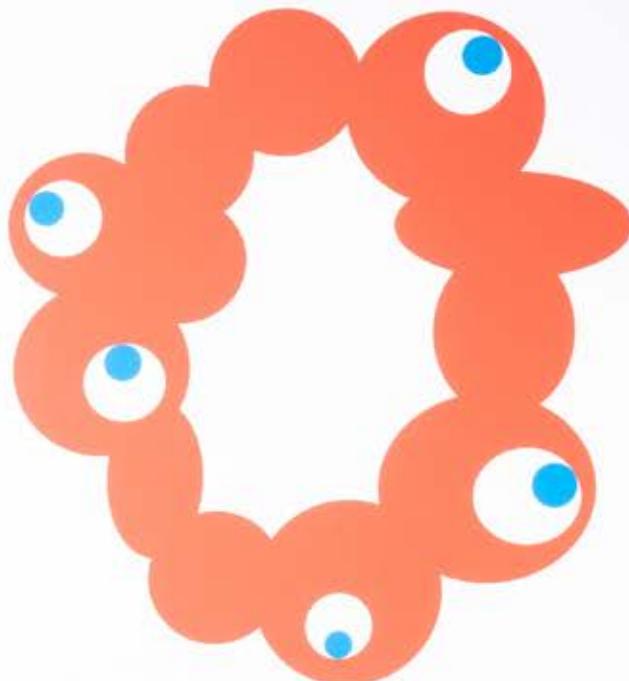


GRANDCUBE

Osaka International Convention Center

PRESS

Vol.32 2020 Winter



OSAKA, KANSAI, JAPAN

EXPO
2025



SPECIAL INTERVIEW

躍動感あふれるCELLたちが、
大阪・関西万博に「命」を吹き込む。

TEAM INARI シマダタモツ・上村慎也

中之島ビジネスフロントライン
水都大阪コンソーシアム

20th
ANNIVERSARY
おかげさまで20周年

躍動感あふれるCELLたちが、大阪・関西万博に「命」を吹き込む。

大阪・関西が迎える最大のMICEイベントである、2025年日本国際博覧会(以下、大阪・関西万博)。

今年8月、大阪・関西万博の周知を担うロゴマーク決定のニュースは、大阪・関西のみならず

日本全国を駆け巡りました。応募総数5894点から選ばれたロゴマークを手がけたのは、

大阪市浪速区稻荷に拠点を置く「TEAM INARI」。代表のシマダタモツさん、コンセプトメイクを

担当した上村慎也さんに、ロゴマークに込められた思いや大阪・関西万博への期待について伺いました。



シマダタモツ
1965年生まれ、大阪府出身。有限会社シマダデザイン代表、グラフィックデザイナー。幼少期に1970年大阪万博の象徴である「太陽の塔」に出会い衝撃を受ける。「太陽の塔」は今回のロゴマークの発想の源となった。

TEAM INARI
シマダタモツ、上村慎也のほか、デザイナーの雨宮深雪、大亦伸彦、藤澤勇佑、イラストレーターの布川侑己の5人で構成。

上村 慎也
1962年生まれ、大阪府出身。上村広告事務所代表、コピーライター。長年シマダ氏とタッグを組み、企業のCIや広告など、さまざまな仕事を手がけている。



全員で
アイデアを出し合い、
議論を重ね、詰めていく。

——大阪・関西万博のロゴマークは、コロナ禍の日本に大きなインパクトをもたらしました。まず、TEAM INARIが誕生した背景についてお聞かせください。

シマダタモツさん(以下、敬称略) もともと、応募するつもりはなかったんです。ちょうど大阪・関西万博のロゴマークの募集が始まった頃、ある大きなコンペに負けてしまって、立ち直れないほどショックを受けていました。万博が開催される5年後というと60歳ですし、「こんなおっさんが作ったらあかんのちゃうか」という気持ちもあって、うちの若いスタッフには「考えてみろ」と言いましたが、僕は出さないつもりでした。

上村慎也さん(以下、敬称略) あの頃のシマダは本当に疲れ果てていて、応募の話をしても「俺はええわ」と言うばかりでした。それが、あるとき、「こんなできたけど、どう思う?」とアイデアを

見せてくれたんです。

シマダ 根っからの“デザイン小僧”なので、やっぱり自分でも作りたくなるんですよね。

上村 そのとき見せてくれたのは決定したロゴマークの原案でしたが、見た瞬間、これは面白いなと。1グループにつき3点まで応募できたので、どうせなら、みんなで、チームとして応募しようとすることになったんです。チーム名は、住所が稻荷だから「TEAM INARI」。いたってシンプルな発想でした。

シマダ 僕らの仕事の進め方として、一回みんなでアイデアを出し合うんです。仕事なら僕がアートディレクションをしてデザインを詰めていく。上村からコンセプトのアイデアをもらってデザインすることもあるし、僕が出したものに対して彼が言葉してくれることもあります。どんな仕事もそういうやり方で進めているので、この時もいつもの流れで全員でアイデアを出し合い、何度もキャッチボールしながら案を固めていきました。公募なのでクライアント向けの仕事ではないですし、せっかく出したら好き放題やろうという、お祭りを楽しむような気持ちでしたね。

上村 70年の大阪万博を経験しているのは、チームの中で僕ら2人だけ。僕は当時8歳で、千里に住んでいたので会場も近かった。パビリオンの列に並んでスタンプ帳にスタンプを押しまくった、あのときの活気や熱気を肌で覚えています。そういうのを作れたらという思いもありました。

CELLに込めた、
1970年大阪万博
の遺伝子。

画像提供:大阪府



——ロゴマーク選考委員会の座長である安藤忠雄氏から、「大阪らしい楽しさもあり、予定調和ではないデザイン」と評されました。このロゴマークは、どのようにして誕生したのでしょうか。

シマダ もともとは正円のシンプルなサークルから始まって、それをつなげていって、バラして、それぞれに個性をつけていきました。さらに楕円にしたり、ちょっと形を変えたりして、「個と個が繋がり、共創が生まれる」という大阪・関西万博のテーマに近づけていった。そういうしているうち

SPECIAL INTERVIEW



に、「細胞」というキーワードが上村から出てきたんです。

上村 サークルが連なるデザインを見て、最初に浮かんだのが「細胞」でした。シマダは「生きもの」という漠然としたイメージを持っていたようですが、大阪万博誘致の際に「生命」や「健康」というテーマがあったので、これを細胞と位置づければ万博との親和性が増していくのではないかと考えたんです。

シマダ 「細胞」という言葉が出た瞬間、ロゴマークに命が吹き込まれたような気がしましたね。それなら、とそれぞれのサークルに細胞の核を入れ込んで、もう一度つなげてみたら、えらい気持ち悪くなってしまって(笑)、さすがにこれは出せんなど。

上村 見たときは僕も正直、面食らいました。目玉がいっぱいでしたから、あれはきつかった(笑)。

シマダ それで、できるだけ気持ち悪く見えないように、サークルの数を検証し、形を整えるなどして調整してきました。そして、ふと、70年の大阪万博のシンボルマークを思い出したんです。シンボルマークは桜の花びらが5枚だから、細胞核

も5つにしようと。そうすることで、70年万博のDNAを注ぎ込むことができるんじゃないかなと。

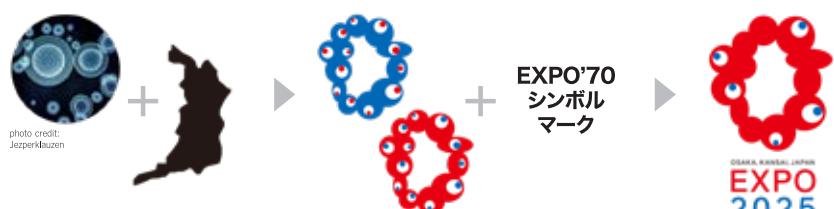
上村 あの桜のマークを思い出したのは大きかったです。

シマダ 今回の一番のジャンプだったと思います。それが決まってからは、デザインチームが一生懸命に色やフォントをシミュレーションして、アイデアを出して作り上げていきました。色は最終的に「躍動感」や「命」を感じさせる赤と、「水都・大阪」をイメージさせる青の2色に絞り込み、フォントは

すべてオリジナルで作りました。

上村 フォントもロゴマークの大重要な要素ですから。

シマダ 東京五輪の公式エンブレムの選考で糺余曲折ありましたし、今回は二の足を踏んだデザイナーも多かったと思うんです。だからこそ、誰も見たことのない、オリジナリティのあるものを意地でも作ってやろう、という気持ちが強かった。このロゴマークはさすがにどこにもない、世界にもないだろうという自信はありましたね。



■ロゴマーク応募時のコンセプト

踊っている。跳ねている。弾んでいる。だから生きている。大阪・関西万博。1970年のデザインエレメントをDNAとして宿したCELLたちが、2025年の夢洲でこれからの未来を共創する。関西とも、大阪府ともとれるフォルムを囲んだメインシンボルだけでなく、CELLたちは、文字や数字を描きだし、キャラクターとしてコミュニケーションする。自由に。有機的に。発展的に。いのちの輝きを表現していく。

強烈な個性が集まる万博には、求心力のある強いシンボルが必要だと思う。

——「踊っている、跳ねている、弾んでいる。だから生きている。」から始まるデザインコンセプトが印象的でした。これは、どのようにして作り上げていったのですか。

上村 いつも通り、シマダとキャッチボールしながら文章を作っていました。「細胞」というワードは出したくなかったんです。「細胞」という文字面が、気持ち悪さを際立たせるのではないかという懸念があった。だから、コンセプトは「細胞」ではなく「CELL」としました。これで審査員の印象も変わるのでないかと。

シマダ デザインコンセプトは200文字までと決まっていたので、上村も大変だったと思うんです。でも、「踊っている、跳ねている」という言葉がついたことで、ロゴマークがさらに躍動感のあるものになった。僕も最初から「静」ではなく「動」のロゴマークを作りたいと思っていたので、しっくりきました。

——ロゴマークの発表後、ユニークなフォルムが大変な反響を呼びました。お二人は、どのように感じましたか。

上村 発表の後にSNSをリアルタイムで見ていましたが、いろいろなパロディがどんどん上がってきて、僕らも大いに楽しませてもらいました。立体になったり、ゲームになったり、歌になったり、大阪環状線の駅になったり、みんなが楽しんでいるこの流れを止めてはいけないと思い、商業以外なら大目に見てほしいと僕らから日本国際博覧会協会(以下、万博協会)に申し出たほどです。中には否定する声もありましたが、それだけ注目されたということ。そこまで話題になるとは、誰も想像していなかったですよね。

シマダ 僕は、学校で子どもたちの間で話題になったと聞いてとても嬉しかったですね。子どもって、ピュアじゃないですか。制作の背景なんかどうでもよくて、見たままを判断してくれる。これからの未来を担うのは子どもたちですから、彼らに喜んでもらえたのが良かったです。

「でたらめ」な会場を、ひとつにする強さ。

——今回のロゴマークの決定で、大阪・関西万博への期待感が一気に高まりました。ロゴマークはこれから、どのような役割を担っていくと思われますか。

上村 万博を知っている世代だから言えるのですが、70年の大阪万博の会場というのはかなり「でたらめ」でした。各国が自由にパビリオンを

建てるものだから統一感がなく、てんでバラバラだった。それが、中心に太陽の塔があることで、万博というひとつの空間が成立していたと思うんです。万博の真ん中には、何かひとつ、強いものが必要。そうでなければ、収集がつかなくなってしまう。このロゴマークは、あのときの太陽の塔の役割を、何分の一かでも負えるのではないかと僕は思っています。

シマダ 確かに70年万博は太陽の塔が求心力になっていましたよね。でたらめだけど、パンチがとんでもなかった。このロゴマークも、その役割を担ってほしいなという思いがあります。だから、できるだけ強いものいい、見ているだけで、会場が楽しくなる予感がわき起こるようなものがいい。あのCELLがどんどん増殖していく、めちゃくちゃでかい輪になっていくとか、考えただけでも楽しいじゃないですか。

上村 万博のアイコンとしていろんな形で存在してくれたら、それだけで調和が生まれるのではないかという期待もあります。そういう意味では、とても広がりのあるシンボルだと改めて思いますね。

——コロナ禍において、大阪も日本も大きな変革を迫られています。大阪を拠点に活動するチームとして、どのようなビジョンをお持ちですか。

シマダ 今回は公募だったので、今自分がやりたいことを表現すべきやと思ってデザインしました。普段の仕事はクライアントの意向があり、それに向けてどう考えていくかというテーマ性がありますが、それでも一案くらいは自分たちが出したいものを出すんですよ。たまに、引っかかることもありますしね(笑)。遊び心を大事にしたいし、つねに面白いことをしたい。それは、どういう状況になっても変わりません。スタッフにも、「とりあえず好き放題つくってみろ」「一回突き抜ける」と、つねに言っています。そこからブラッシュアップしていくべき。そうは言っても、なかなか突き抜けることは難しい。アイデアや発想は良くても、ロゴなどは読めないと意味がない。いかに読めるようにするか、それも大事です。

若いときは「好きにさせてくれたら金はいらん」というスタンスでした。独立した当初は、好き勝手やりたいわけですよ。誰の意見も入っていない、自分が作ったものがどう評価されるかを知りたかった。それで個人の店や、オーナーが知り合いの店の仕事をさせてもらって、少しずつ作品が本に載ったり、賞をいただいたりするようになって、「これで間違ってないんや」という自信につながっていきました。今回のロゴマークは、今まで積み重ねてきたことの集大成かもしれません。ようやく実りました、大変でしたけどね。



大阪・関西万博は、大阪を盛り上げる「神輿」。

——大阪・関西万博は、大阪に活気をもたらし、世界に大阪を発信する場でもあります。大阪・関西万博に、どのようなことを期待していますか。

上村 よく「大阪を元気に」と言いますが、ちょっと嘘くさいなと思うんですよね。どう元気にするのか、その先は誰も言ってくれないです。それが今、ようやく2025年が見えてきて、「大阪・関西万博」という、みんなで担げる「神輿」ができるわけです。いろいろな企業や団体が、この神輿に乗っかって、みんなで担いで大阪を盛り上げてくれるといいなと思います。

とくに大阪国際会議場は、大阪・関西万博の「サテライト会場」と言ってもいい位置にありますよね。会場と川でつながっているので水上バスで行き来することもできる。たとえば、ロゴマークのパロディを一堂に集めて、アートとして大阪国際会議場で展示するとか、巨大パネルでロゴマークを作ってホールに設置するとか、万博協会と密につながって定期的にいろいろなことをしてもらえた面白い。中之島エリアを巻き込みながら、「みんなで万博を応援しよう」という流れを創ることもできるのではないかでしょうか。

シマダ 僕も周りの人たちから、「次の万博に向けていろいろ考えている」という話を最近よく聞くんですよ。そういう人たちと万博協会の橋渡しを、僕らができたら嬉しい。一緒に盛り上げていけたらいいなと思っています。大阪・関西万博は、間違いなく「今までにないもの」であふれかれる場になるはずです。その中で、このロゴマークがどう見えるのか、どう使われるのかが今から楽しみでなりません。できれば、ずっと関わっていきたいですね。

上村 地元である大阪でも、大阪・関西万博というのは、まだまだ他人事のような気がします。あと5年で、どれだけ楔を打てるか、どれだけ人を巻き込むことができるか、だと思うんです。みんながひとつになって万博という神輿を担いで、大阪全体で大阪・関西万博を盛り上げていってほしい。その船頭を、大阪国際会議場さんにも期待したいなと思います。

10/10[土]～12/19[土]

西国三十三所草創1300年記念～京阪グループ開業110周年×大阪国際会議場開業20周年

「京阪沿線ぶらり巡礼」



株式会社大阪国際会議場は、京阪ホールディングス株式会社様との協働イベントとして、地域資源を活かした来訪・交流の促進や文化・観光の振興を目的に、西国三十三所草創1300年記念「京阪沿線ぶらり巡礼」を本年10月より開催いたしました。本イベントは、京阪沿線にある西国三十三所や自治体、大学と連携し、同沿線の西国三十三所ゆかりの地や寺院などにスポットを当てた講座やガイドウォークを開催し、地域に密着したまちの文化や魅力を発信するもので、その一環として、10月10日(土)から12月19日(土)の期間中、「歴史講座」全6回を大阪国際会議場にて実施しました。

11/3[火・祝]

「秋の絵本クルーズin中之島」

11月3日(火・祝)、水都大阪コンソーシアム様主催の「秋の絵本クルーズin中之島」が毎年恒例の水辺の祭典「中之島リバーフェスタ2020」と同時開催されました。

「秋の絵本クルーズin中之島」では、八軒家船着場と大阪国際会議場港を結び「絵本読み聞かせクルーズ」や「絵本もちこみクルーズ」が行われ、発着地には、アトリエヤマダ代表の山田龍太さんと全国各地の子どもたちが描いた巨大絵本や大阪市西淀川区の高校生たちと描いたドラム缶 絵本が、また大阪国際会議場内には巨大絵本や段ボールでできた恐竜などが展示されました。



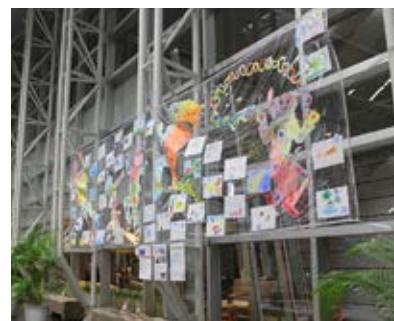
アトリエヤマダ

11/3[火・祝]～12/27[日]

つづく!未来の大人たちへ

「キテミテ中之島2020」

京阪ホールディングス株式会社様主催のアートイベント「キテミテ中之島2020」が本年も9月27日(日)より行われております。大阪国際会議場もサテライト会場として、アーティスト・ヨシムラリエさんのインсталレーションと「みんないきものがたり」作品群を、2Fラウンジにて11月3日(火・祝)～12月27日(日)まで展示しています。



＼リアル&バーチャルのハイブリッド型イベント、多数開催中です。／

大阪国際会議場では、新型コロナウイルス感染症拡大防止に向けた取り組みとして、ガイドラインを策定し、WEBサイト上に公開しております。当館では本ガイドラインに基づいて、主催者様、ご来場者様への感染症拡大防止施策へのご協力をお願いすると共に、会場内におけるさまざまな対策の徹底により、引き続きお客様に安心して会場をご利用頂けますよう取り組んでまいります。

※詳細につきましては、右のQRコードよりご確認ください。

こうした中、リアルとバーチャル(Web)の併催によるハイブリッド型イベントが多数開催されております。

写真は、本年10月21日(水)～23日(金)開催「計測展2020 OSAKSA」(一般社団法人日本電気計測器工業会(JEMIMA)様主催)の様子です。本イベントは、期間中開催の基調講演や特別講演のライブ配信を組み合わせた、リアル開催にオンラインを加えたハイブリッド型展示会として2021年1月16日までオンライン講演やオンライン展示などのコンテンツ配信も実施されています。(https://jemima.osaka)

弊社では、こうした主催者様の取り組みをサポートすると共に、独自の「WEB配信プラン」もご用意しております。詳細につきましては、弊社営業担当までお問合せください。



イベントカレンダー

<https://www.gco.co.jp/event/>



※新型コロナウイルス(COVID-19)の影響により、開催中止、または延期となる場合があります。最新の情報は、主催者様へお問合せください。



クルーズ×アートで 水辺の魅力をPR

小西 本日はお時間をいただき、ありがとうございます。早速ですが、水都大阪コンソーシアム様の役割を教えていただけますか？

田中 大阪の水辺を活かした都市魅力づくりに取り組む組織です。2001年に始まった国の都市再生プロジェクトとして、「水都大阪の再生」が採択され、様々な取組みが行われた結果、水辺に賑わいのある都市となった。こうした取り組みの成果をさらなる「成長」へつなげるために、2017年2月に大阪府、大阪市、大阪商工



株式会社大阪国際会議場 営業部企画課 小西寿依

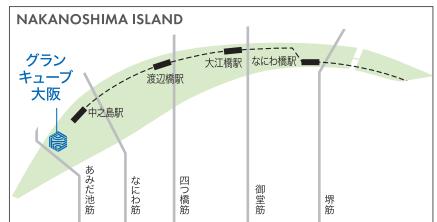
会議所、関西経済連合会、関西経済同友会、大阪観光局、民間の舟運事業者団体、学識経験者、で構成する公民連携のプラットフォームとして発足しました。

小西 11月3日には「秋の絵本クルーズ in 中之島 2020」を開催されましたね。

田中 はい。このイベントは「こども本の森 中之島」の前川千陽館長と絵本作家のもっさんみいこさんが読み聞かせをする「絵本読み聞かせクルーズ」、こども本の森 中之島を見学後、本を借りて船に乗船し、船上で読書ができる「絵本もちこみクルーズ」の2本立て企画で、各船着場にはアトリエヤマダの山田龍太さん監修によるダンボール巨大絵本アートを展示しました。

小西 当館も1階に作品を展示させていただきました。イベントの反響はいかがでしたか？

田中 約230人を募集したところ、募集開始当日に満席になるほどの盛況で、参加の方々にも好評でした。読み聞かせをする前川館長ご自身が楽しめていましたが、それこそが参加者を楽しませる秘訣だと再認識しました。アンケートには「舟に乗ったことがなかったのでいい経験が



できた」「子どもが非日常を楽しむいい機会だった」と、記述での回答もたくさん頂き、クルーズ×アートで水辺を楽しんで頂くひとつの仕掛けが出来たと考えています。アンケート用紙の裏に絵を描いてくれたお子さんもおられましたね。当企画は初めての試みだったので、読みながらだと船酔いするかもしれないなど心配な面もありましたが、そのようなトラブルもなく、たくさんの皆さんに楽しんで頂けました。今後は、クルーズ事業者がこうした企画でビジネス展開できるようサポートしていけばと思っています。

中之島で水辺のアート巡り

小西 当館も水都大阪を盛り上げていきたいと

考えていますが、中之島のどこに魅力を感じていらっしゃいますか？

田中 陸上からの眺めもいいのですが、水上から見る景色はまた違って見えます。そこに中之島のポテンシャルを感じます。また、川が口の字でつながる「水の回廊」が都心にあるのは世界的に珍しく、川辺には見所もたくさんあります。コロナ禍で、今は遠出が難しい状況ですが、実は近場のこの水辺で非日常を体験できるということを多くの人に知っていただきたいですね。

小西 先ほどクルーズを体験させていただきましたが、見慣れた風景も船上から見ると新鮮でした。そんな魅力ある水辺をどう活用していくかとお考えですか？

田中 2020年2月には、船着場にアート作品を展示し、ワークショップなども楽しめる「水辺の芸術祭」を開催する予定でしたが中止になつたので、このようなアート×水辺の企画に取り組んでいきたいと考えています。六甲ミーツ・アート芸術散歩や瀬戸内国際芸術祭のような、中之島全体をアート会場と捉え、クルーズで各会場を移動する「中之島で水辺のアート巡り」企画をいつの日かやってみたいと思っています。中之島は魅力あふれる街ですが、大阪の中心地であり続けるためには核になるものが必要です。そのひとつがアートだと私は考えています。水辺の取り組みがそのきっかけに

なることを期待しています。

小西 中之島の水辺で、地元の作家さんと楽しまれたら素晴らしいですね。海外から当館に来られた方のアフターコンベンションにもいいですし、国際的な交流も実現できそうです。

田中 私たちも、国際会議場前港をコンベンション後のクルーズにご利用いただきなど、今後さらに国際会議場さんと連携していきたいと思います。

大学や映画とのコラボで認知度UP

小西 今後は、どのような展開をお考えですか？

田中 今年度までは“成長”、来年度からは“持続的な成長”を目指すフェーズに入り、組織形態は継続されますが、基本コンセプトが見直される中で、今後は各取り組みのレベルアップを図っていく必要があると考えています。また、大阪では大阪・関西万博をはじめとする大きなイベントが予定されており、その中には水辺と関わるものもあるのでしっかりと連携したいと思います。水都大阪の素晴らしさを知ってもらうため、水の回廊で撮影したMBSアナウンサーカレンダーの付録に「ロケ地マップ」を作成したり、若い人たちとつながれる大学との連携も重視を考え、関西大学とのコラボレーション企画

で機関誌「JAF Mate」に水都特集を組んでもらつたりしました。12/25公開のアニメ映画「ジョゼと虎と魚たち」において、大阪の各所が取り上げられた映画のロケ地マップが制作されたので、その中で水辺にまつわる「水都クイズ」を、水都大阪コンソーシアムのホームページ上で実施するなど、映画とのコラボレーションも実現したいですね。今後も積極的にメディア・大学など様々な関係箇所と連携して水都大阪のブランディング活動につなげ、水辺のファンを増やしていきたいと思います。コロナ前とは社会が一変してしまいましたが、関係者と力を合わせ、少しでも水辺から大阪を元気にしていく取組みが出来ればと考えています。

小西 当館も“水辺の会議場”として、国際会議場前港を活用し「水都・大阪」を盛り上げていきたいと考えています。今後ともよろしくお願ひいたします。



水都大阪コンソーシアム 田中智彦ディレクター



(右)流線型の観光艇「水都号」の絵葉書。「大阪モダン街」と題して朝日新聞社、朝日会館、ダイビルを望む。

(左)滑稽漫画「大阪見物」と題した絵葉書セットに描かれた水都号。作画は千葉かずのぶ。

※いずれも橋爪紳也コレクション

群が川に面する北浜界隈は「東洋のベニチア」、煙突が林立する工場地帯は「東洋のマンチャエスター」と、海外集まる中之島は「東洋のパリ」、洋館近代化を果たすなかで、市街地を縦横に走る運河のネットワークを利用した新たな公共交通機関が求められた。契機となつたのが明治36年、天王寺近傍で開催された「第五回内国勧業博覧会」である。来街者や市民の足となる新しい交通機関として、市営の乗合船が計画された。天満橋と国津橋を結び、さらに東横堀川・西横堀川・道頓堀川を巡るルートが検討されたが、

大阪が「水の都」、あるいは「水都」と呼ばれるようになったのは、明治30年代頃であったという。公共建築が

新設された大阪巡航合資会社が営業を開始したのは、明治36年3月7日のことだ。当初は、4隻の発動汽船で

博覧会の開幕に間に合わせるべく、

公営では採算があわなかつたようだ。指定航路の独占的な事業権利を付与することで民営化をはかる。

新町橋・湊町・日本橋間を結んだ。ち

に道頓堀・東横堀川・木津川・土佐堀川・西道頓堀川を一巡して運航、

さらに安治川筋に航路を延伸する。

会社は総収入の6%を大阪市に納入した。地方自治体による舟運の報償契約は、日本初の試みであった。

明治40年には船数82隻、1日に約2万人の乗客を運んだ。事業は安定をみたが、その後、市電との競合に敗れ撤退を余儀なくされた。

大阪市は、流線型の美しい船体、船内をサロン風とする豪華船を購入、観光艇「水都号」と命名して運用を始めた。女性ガイド「マリンガール」が、大阪の歴史と現状を巧みに説明しながら、川筋と大阪港を周遊した。

「水都号」は、市営の遊覧バスと淀屋橋で連絡した。水路と陸路を組み合わせた他、ないユニークなコンテナとして、いちやく大阪観光のハイライトとなつた。しかし戦時体制に入ると運航は中断される。戦争や災害のない平和な時代にのみ私たちが船から「水都大阪」の風景を楽しむことができる。

中之島トリビア

巡航船と観光艇「水都号」

NAKANOSHIMA TRIVIA

第7回



橋爪紳也 Shinya Hashizume

大阪府立大学研究推進機構特別教授
大阪府立大学観光産業戦略研究所長

FOCUS ON GRANDCUBE

FOCUS

3

Hospitality

ホスピタリティ



グランキューブ大阪は、一つの建物にあらゆる機能が備わったオールインワン設計が大きな特徴の一つです。

その中には、ご来場頂いたお客様をおもてなしし、心のこもったサービスによってゆったりとお寛ぎ頂くための飲食施設も含まれています。

なかでも、12Fに位置する「レストラン グラントック」は、隣接するリーガロイヤルホテルの直営で、地上80mの高層から大阪のランドスケープを一望しつつ本格的な西洋料理も堪能できる天界のグルメラウンジ。貸し切り利用や、個室利用も可能なため、会議の後のおもてなしスペースとしてもご活用頂けます。

また5Fの「洋食キッチン フジオ軒」では、日替わりの洋食ランチ、自慢の手仕込みハンバーグやカレーライスなどバリエーション豊かなメニューをご用意し、気軽に美味しい昼食をお楽しみ頂ける他、貸し切りでのご利用も可能です。

さらに2Fの「OIC CAFE」は、全面ガラス張りの広いスペースにソファやテーブルがゆったりと配置され、高級感漂う落ち着いた雰囲気の中で、カフェや軽食をリーズナブルな価格でお楽しみ頂ける人気のスポットです。会議前後のコーヒーブレイク、また昼食やお打合せのスペースに幅広くご利用頂けます。

この他、この春のリニューアルにより、2Fラウンジ、地下1階のラウンジB1にも、ソファやテーブルを備え、ゆったりと快適な時間をお過ごし頂けるスペースをご用意しております。

本年開業20周年を迎えた大阪府立国際会議場(グランキューブ大阪)は、「日本一のMICE都市」を目指す大阪のビジネスと文化の中心地・中之島にあって、これまでに、国内外から大勢の来場者が集う大規模な国際会議、学術会議、カンファレンス、展示会、イベントなどの会場として用いられてきました。前号と今号の2回に分けて掲載する本記事「FOCUS ON GRANDCUBE」では、建築界の天才と謳われた故・黒川紀章氏の傑作であるグランキューブ大阪の設計・設備上の4つの側面に焦点を当て、国際会議場、また公共施設としてのその優れた機能性とユーチュアビリティをご紹介します。

第2回目の今号では、ホスピタリティ及びセキュリティ&セーフティに焦点を当てます。

FOCUS

4

Security & Safety

セキュリティ&セーフティ

国内のみならず、海外から多くのお客様が訪れる大阪国際会議場。何よりも優先されるべきは、お客様の安全、そして安心。グランキューブ大阪の設計・設備面の4つの大きな特徴として、最後に焦点を当てるのが、公共施設として最も重要なセキュリティ&セーフティ面の盤石の備えです。

まず、中之島エリアという立地面に着目すると、耐震護岸に守られたこの一帯は、津波浸水の可能性が非常に低く、広域避難場所にも指定されるほど、防災面で安心なエリアに位置すると言えます。

また何より、世界的建築家・黒川紀章氏の構造体建築の傑作・グランキューブ大阪は、震度6の揺れでも倒壊する危険性の低い極めて頑丈な躯体によって成り立っており、これに加え、館内各階には二重の非常階段、防火扉、防火シャッターを完備。火災や地震などの万が一の災害時に避難しやすく、かつ被害が広がりにくい構造となっています。

また、特別避難階段・バルコニー避難階段の設置、消火栓・消火器、災害救助用品、AED等の配備、さらに館内には地震計を内蔵した緊急地震速報受信機を完備。機器本体と気象庁の緊急地震速報の2ルートからより正確な情報を入手して反映します。また主催者様に「安全対策ガイド」を配布。緊急時の避難誘導や経路案内などを徹底しています。

さらに、防災センターには、パートナー企業の警備会社が24時間365日常駐して万全のセキュリティ体制を維持すると共に、グランキューブ大阪の全スタッフも年2回の防災訓練の実施と「OICC WAY」の行動指針により、セキュリティ&セーフティに関わる意識とスキルの維持向上に励んでいます。

■前号と今号で4つの側面から焦点を当てたグランキューブ大阪の公共施設としての優れた機能性とユーチュアビリティ。グランキューブ大阪では、引き続きこれらの特徴の維持と研鑽に励み、より多くのお客様にお選び頂ける施設として日々努力を重ねて参ります。



(電車)

- 京阪中之島線「中之島(大阪国際会議場)駅」(2番出口)すぐ
- JR大阪環状線「福島駅」から徒歩約10分
- JR東西線「新福島駅」(2・3番出口)から徒歩約10分
- 阪神本線「福島駅」(3番出口)から徒歩約10分
- 大阪メトロ「阿波座駅」(中央線1号出口・千日前線9号出口)から徒歩約15分

(バス)

- JR「大阪駅」駅前バスターミナルから、大阪シティバス(53系統 船津橋行)
または(55系統 鶴町四丁目行)で約15分、「堂島大橋」バス停下車すぐ
- シャトルバスが、「リーガロイヤルホテル」とJR「大阪駅」桜橋口の間で運行しており、ご利用いただけます(定員28名)
- 中之島ループバス「ふらら」で地下鉄・京阪「淀屋橋駅」(4番出口・住友ビル前)から約15分

株式会社 大阪国際会議場

OSAKA INTERNATIONAL CONVENTION CENTER CORP.

〒530-0005 大阪市北区中之島5丁目3番51号
Tel.06(4803)5555(代表) Fax.06(4803)5620



GRANDCUBE PRESSは、
地球上にやさしい広報誌。
この印刷物は環境に配慮した
植物油インクを使用しています。